

大磯町

広報 おおいそ

2004年 12月

合併50周年記念特集号

No.543



合併祝賀行事の様子

合併50周年を迎えて 大磯町長 三澤 龍夫

昭和29年12月1日、現在の大磯町が誕生しました。

駅前テレビを設置

テレビ受像の時間は、正午から午後1時までと、午後6時から10時まで（昭和30年10月）

測量を始めた国鉄新幹線

いわゆる弾丸列車の計画は、当町の北端を通す。（昭和35年1月）

県下の施設で大磯小の給食始まる

いただきますを待っている、大磯小学校のよい子たち（昭和38年2月）

4月1日消防署が発足

火災の予防、早期通報にご協力を昭和43年3月）

生まれ変わる大磯港

500トン級の船が5隻同時に接岸可能（昭和48年2月）

増え続けるごみとの戦い

1日平均26・4トン5年間で1・6倍も（昭和48年7月）

町内のごみか、し尿処理場を造ろう

（昭和49年5月）

孤独な老人等を介護する

ヘルパーの活動を追って（昭和50年8月）

国府支所を建設、住民サービスの向上に（昭和53年5月）

過去の広報から目に付いたものを、いくつか拾い出してみました。時代の流れと共に大磯町もその姿を変えてきました。

昭和30年代、40年代には基盤整備、各施設の建設等が急速に進み、町の骨格が造られ、それ以後は現在にも繋がるごみ問題、高齢者福祉などの様々な課題が見えてきます。

平成になり、公共下水道事業も進めております。運動公園は完成しました。

50年間の行政の流れを見ていきますと、この大磯の町は、町民の参加と協力により創りあげられています。

し尿処理場の問題では当時の町長が、候補地の住民の皆様へ受け入れを、全町民でお願いしようと広報で訴えておられます。

町の大きな課題に対しては、全町民で考えていただくという、この大磯は都市部では考えられない政治の形をとることが可能です。

合併50周年の今、町民の皆様と共に新しい大磯町を創るという基本を確認し、スタートしたいと思います。

合併50周年にあたって

大磯町議会議長

清水 弘子

町民の皆様には、町議会活動に深いご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

大磯町が、昭和29年12月に旧大磯町と国府町が合併して、めでたく50周年を迎えるにあたり、町議会を代表いたしましたし、お祝いを申し上げます。

過去の歩みを見ても、合併以来の、住民福祉の増進、産業の振興、都市基盤の整備など、これもひとえに、先人の輝かしい偉業と、先輩諸賢のご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、21世紀を迎え現在の社会は、低迷する経済情勢をはじめ、厳しい財政状況、少子高齢化、地方分権、地球環境など、課題を前に大きな変革の時代を迎えています。

本町におきましても、農林漁業の振興

・商工業や観光の分野では新たな事業の創出、また教育環境や少子高齢社会への対応など多くの課題を抱えております。

町議会では、9月定例会からCATVによる議会放送が開始となりました。町民の皆様との連携を密にし、美しい自然と文化を継承しながら、住み慣れた家庭や地域で安心して暮らせ、誇りの持てるまちづくりのため、さらに努力して参りたいと考えております。

終わりに、合併50周年を祝福するとともに、これを契機とし、町民の皆様と共に大磯町のさらなる発展のため、まちづくりに励み飛躍の時代にしたいと思っております。

今後とも、より一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新大磯町発足のころのこと

鈴木昇

大磯町と国府町が合併し昭和29年12月1日に新大磯町が発足してから半世紀、50年がまたたくまにすぎってしまった。

旧大磯町の廃町式は30日午後1時から大磯幼稚園で行われ、新大磯町の開町式は12月1日午前10時から大磯中学校講堂で行われた。

曾根田大磯町長は立候補のため退職し、後藤国府町長は新大磯町の町長職務代理として残った。

新大磯町の初議会が12月1日午後1時30分から開かれ、議長副議長が選出され、総務厚生、観光、土木、教育、経済の六つの常任委員会が構成された。このときの議員は旧大磯町24名、旧国府町20名、計44名であったが翌年5月13日の議会で、議員定数を22名とし、旧大磯地区15名、旧国府地区7名。任期が11月30日まであるのを6月中に全員辞表を提出することをとりきめた。なお新大磯町長は29年12月16日に無投票で曾根田と決定した。

新大磯町の議員と教育委員選挙のため、大磯町選挙管理委員会は、大磯町広報号外で大磯町議会議員選挙区

第一選挙区、定員15名
第二選挙区、定員7名
大磯町教育委員会委員
定員4名

とし、候補者氏名、年令、前別を掲げ、全戸に配布した。このころ教育委員は公選で、27年10月に選挙が行われ当選した4名と議会選出委員の5名で教育委員会を構成していた。

新町発足前後のことで思いに残るのは、「大磯カーニバル」で、財源のない時代に町費を使わず、東京横浜にある企業をスポンサーにして、大磯町の観光宣伝をしようとした事業であったから、全町民が



大磯カーニバルの様子



合併10周年を伝える広報(昭和40年6月発行)

知恵と油汗をしばった。昭和29年7月31日から8月2日までの第1回から、35年の7回まで続けられたがこのかん、作家獅子文六、画家安田靉彦、国務大臣太田正孝、芸術院長高橋誠一郎、前国連大使沢田廉三、作家福田恒存、芸大教授吉田五十八、作家大岡昇平、松竹大船撮影所奈良真養、洋舞家青山圭男、エリザベスサングラスホーム沢田美喜、写真家浜谷浩、女優小山明子、声楽家佐藤美子、作家菊池重三郎らが順次審査員となり、仮装行列や美人コンテスト、撮影コンクールを審査し、若山彰、織井茂子、フランク永井らが熱唱した。この見物人は10万人にも達し、このため交通渋滞が増大し、遂に中止となってしまう。

昭和28年に国府町に建てら

れた大磯ロングビーチは、翌年大磯町との合併で大磯ホテルとなり、32年に各種のプールが造られた。37年に39年開催の東京オリンピック、ヨットの選手村に決定され、ホテルの増改築が急ピッチで進められ、39年9月15日から10月27日まで開村し、ノールウェー皇太子をはじめ43カ国285名の選手役員を泊め、10月15日には大磯町主催のレセプション

が450名を集めて盛大に行われた。東京オリンピックのため遅れていた合併10周年記念式が大磯ロングビーチ別館大ホールで行われた。このとき吉田茂と安田



カーター大統領が訪町

靉彦が大磯町名誉町民に推薦され、出席した吉田は「大磯町名誉町民の称号を喜んでお受けします」と挨拶し、参列者の盛大な拍手を受けた。
合併20周年記念式は50年5月8日、このホテルで挙行された。このとき名誉町民に推薦されたのは故島崎藤村と91歳の高橋誠一郎で、私は高橋を迎えに玉城山荘を訪れたが、まだ眠っていたのにあわてた。20周年には町の木として「黒松」と「さざんか」が選ばれた。なお、54年6月カーター大統領が大平首相と旧吉田茂邸で会談したとき、大統領はロングビーチのヘリポートを利用した。豊田町長は川瀬竹春造の「青地金欄手芦雁図」の鉢を贈った。カーターが喜んだ、小鉢の話は当日日本全土に放映された。過ぎ去った50年の思い出のひとつである。
(元大磯町郷土資料館館長)

のあゆみ

1954~2004

- 1976(昭和51) 県下NHK音楽コンクールで大磯小学校合唱団最優秀賞(9月)
- 1977(昭和52) 裡道に児童館完成(6月)
- 1978(昭和53) 町環境美化センターさざんか園操業開始(5月) 国府支所新庁舎完成(12月)
- 1979(昭和54) 長者町老人憩の家完成(4月) 町立図書館国府分館の開館(4月) 虫窪に老人福祉センター完成(5月) 旧吉田邸で日米首脳会談(大平首相・カーター大統領)開催(6月)
- 1980(昭和55) 国府中学校移転新築校舎の完成(3月) エリザベス・サンダースホームの創設者澤田美喜が名誉町民に(5月) 西久保福祉館完成(6月) 町の人口3万人を超える(7月) 石神台公民館完成(11月)
- 1981(昭和56) 西小磯東老人憩の家完成(5月) 駅前自転車駐車場完成(12月)
- 1982(昭和57) 米国ラシン市と第2の国際姉妹都市提携(2月) 寺坂老人憩の家完成(3月) 役場東側に保健センター完成(6月) 第4代町長に高島健二就任(12月)
- 1983(昭和58) 馬場に老人憩の家完成(4月) 現在位置に図書館新築完成(8月)
- 1984(昭和59) 神明町にふれあい会館完成(3月) 大磯海水浴場開設100年記念式典(6月) 町の鳥にかもめを制定(12月) 合併30周年記念式典(12月)
- 1985(昭和60) 現在位置に町立国府保育園の開園(4月) 町議会で全国初の女性議長誕生(7月) 大磯・二宮トンネル開通(12月)
- 1986(昭和61) 東町福祉館完成、東小磯防災館完成(3月) 大磯小学校にオープンスペース校舎完成(4月)
- 1987(昭和62) 北下町福祉館完成(3月) 嶋立庵復元改築落成(3月)



町役場に平和宣言記念碑建立(4月)

- 1988(昭和63) 第1回なぎさの祭典開催(7月)



郷土資料館開館(10月)

- 1989(平成元) 狹隘(あい)道路等拡幅整備事業の実施(1月) 町制施行100周年の記念式典、駅前広場に記念モニュメント建立(5月) 町役場土曜閉庁実施(6月)

- 1990(平成2) 旧三井別邸跡地に県立城山公園開園(3月) 虫窪にごみ処理施設完成(4月) 東町から公共下水道整備に着手(9月) 第5代町長に石井宣和就任(12月)
- 1992(平成4) 国府新宿福祉館完成(3月) 西小磯防災館完成(3月) 国府小学校にオープンスペース校舎完成(4月)
- 1993(平成5) 新し尿処理施設の稼働(3月)
- 1994(平成6) 茶屋町に福祉センターさざれ石完成(10月)
- 1995(平成7) 照ヶ崎プール新装オープン(6月)



- 1996(平成8) 国府支所に西部地区防災施設完成(7月) 旧島崎藤村邸を一般公開(11月)
- 1997(平成9) 町道幹16号線城山トンネルが開通(3月)



- ダイオキシン対策、ごみの分別収集開始(6月)
- 1998(平成10) 町の花にはまひるがおを制定(2月) かながわ・ゆめ国体(ゴルフ・綱引)開催(9~10月) 第6代町長に片野一雄就任(12月)
- 1999(平成11) 虫窪に岩田記念室内競技場完成(1月) 県青少年の家跡地に大磯町生涯学習館開館(4月)
- 2000(平成12) 高麗・東町・大磯地区の一部地域で公共下水道供用開始(5月)
- 2001(平成13) 大磯運動公園テニスコート完成(5月)
- 2002(平成14) 町教育研究所設立(4月) 東海道シンポジウム大磯宿大会開催(10月) 天皇・皇后両陛下エリザベス・サンダースホームをご視察(11月) 第7代町長に三澤龍夫就任(12月)
- 2003(平成15) 高麗・平塚市桜ヶ丘間の高麗大橋の開通(3月) 国府本郷に横溝千鶴子記念障害福祉センター完成(4月) 国府小・中学校生沢分校が県立おおいそ学園内に開校(4月) 町立幼稚園で3歳児保育開始(4月) 女性町議半数になる(7月) 大磯運動公園野球場完成(9月)
- 2004(平成16) 大磯運動公園多目的広場完成、全面オープン(10月) 新大磯町50周年を迎える(12月1日) 人口32,487 世帯数11,713(11月1日現在)

(敬称略)

- 参考資料 - 『町勢要覧「大磯」』(町史編さん近現代) 『広報おおいそ』(部会作成)

合併50年 大磯町

1954(昭和29)9月17日合併協議が成立



12月1日、旧大磯町と国府町が合併し新大磯町が発足 初代町長曾根田恭男就任、初代議長湯井秀雄就任 新町の人口は22,087(12月)
大磯町消防団の結団式挙行(6月)
町立国府保育園完成(6月)
大磯カーニバル開催(7月)

1955(昭和30)昭和天皇・皇后両陛下 エリザベス・サンダースホームをご視察(10月)



第1回町民体育大会開催(10月)

1956(昭和31)第16回メルボルンオリンピックに町民二宮秀雄出場決定(9月)
初代教育長に渡辺長吉就任、任命制教育委員による第1回会議開催(10月)

1957(昭和32)日本NCR大磯工場の完成(10月)

1959(昭和34)町立国府幼稚園の開園(4月)

1960(昭和35)新町建設計画の策定(1月)
月京に児童館新設(4月)

1961(昭和36)旧大磯・国府両農協合併、大磯町農協発足(6月)
日本端子大磯工場が完成(10月)

1962(昭和37)大磯小学校完全給食の開始(12月)
第2代町長に中島玄良就任(12月)
電話の自動化(大磯郵便局より分離、平塚電話局分局になる)

1963(昭和38)西独リュブケ大統領夫妻大磯アカデミーハウス訪問(11月)



1964(昭和39)大磯バイパスの完成、虫窪にごみ焼却場完成(3月)
西湘バイパス工事着工(6月)
大磯町合併10周年、町章制定(8月)
大磯ロングビーチに東京オリンピックヨット選手村開村(9月)

東京オリンピック聖火リレー大磯を通過(10月)



国府小学校に給食室完成(11月)

1965(昭和40)名誉町民条例制定、元首相吉田茂、画家安田靉彦が名誉町民に(5月)

県下町村第1号救急車の配備(8月)

1966(昭和41)西湘バイパス大磯地区開通(6月)



1967(昭和42)女性町議の初当選(7月)
大磯港改修につき県知事方針確定(9月)

1968(昭和43)大磯町消防署発足(4月)
米国デイトン市と国際姉妹都市提携(9月)

1969(昭和44)小田原厚木道路開通(3月)
西湘バイパス中丸二宮間開通(4月)
町立大磯保育所の開所(6月)

1970(昭和45)初代町長曾根田恭男が名誉町民に(4月)
照ヶ崎に町営プール新設(7月)
NHK全国学校音楽コンクールで大磯小学校合唱団が1位になる(10月)
第3代町長に豊田由登就任(12月)

1971(昭和46)大磯港に魚市場完成(4月)
現在位置に大磯町役場新庁舎完成(6月)



高麗に相模貨物駅開業(9月)

1972(昭和47)高麗山が県天然記念物に指定(3月)
現在位置に大磯警察署新庁舎完成(4月)

1973(昭和48)大磯小学校合唱団TBSこども音楽コンクールで全国1位になる(3月)
町立小磯幼稚園の開園、島崎藤村ゆかりの長野県小諸市・山口村と文学姉妹都市提携(4月)
東小磯跨(こ)線橋開通(10月)

1974(昭和49)町立月京幼稚園の開園、西小磯老人憩の家完成(4月)
南本町に消防庁舎・武道館完成(7月)
虫窪老人憩の家完成(10月)
虫窪にごみ焼却場新施設完成(11月)
町の木にくろまつ、さざんかを制定(4月)

1975(昭和50)合併20周年記念式典、文学者島崎藤村と経済学者高橋誠一郎が名誉町民に(5月)
生沢プール完成(7月)

新大磯町発足のころ

松元 宏

現在の大磯町は、1954年（昭和29）12月1日旧大磯町と国府町とが合併して発足した新大磯町である。この12月でちょうど50周年、半世紀の歩みになる。

歴史をたどれば旧大磯町は1889年（明治22）町村制施行時、東海道の宿場大磯に高麗・東小磯・西小磯の3旧村（大字）が合併して発足した。また国府町は、同時に成立した国府本郷・国府新宿・生沢・寺坂・虫窪・黒岩・西久保の7旧村（大字）の合併による国府村から1952年（昭和27）4月町制に移行している。

国府の名称は平安時代末期に相模国府が当地に置かれていたという由来によるとされている。明治・大正期の郡制時代には長く大磯に郡役所があり、歴史的に当地は地域社会の中心に位置してきた。

敗戦後の復興が進み占領が終了した頃、地方自治体の自立強化をはかるため1953年（昭和28）9月町村合併促進法が制定され、この法によって全国的に町村の合併運動が始まった。促進法の指針は、教育・道路水道等社会インフラ・住民サービスや増える委任行政へ対応できる行財政能力をもつ町村へ、人口8千以上の規模への拡大が求められている。当時の国府町人

口は6千に過ぎなかった。現在、旧国府地区の人口は1万4千余り、2・3倍ほどの増加であり、この50年全町人口の増加率1・5倍に比較してみると、合併後の新町発展の効果を際立たせている一面である。

当時両町の合併ばなし、合併



新大磯町発足を伝える広報号外（昭和29年11月29日発行）

あつた。この時大磯町はとりあえず白紙の立場で「合併問題そのもの」（旧広報第4号）を研究するという立場をとっている。翌1954年（昭和29）に入ると4月22日大磯・国府・二宮による3町合併研究会が発足し、3町合併案の検討が急速に進んだ。この場合、3町合計人口は3万5千余り促進法の特例による市制が可能になる。

大磯町は、同年6月町内各層

の経緯はどのように進んだのであろうか、その概略は次のようである。1953年（昭和28）町村合併促進法の制定を目前にした8月、隣接平塚市（昭和7年市制）から大磯町へ合併の打診があつた。一方で従来から大磯町は単独で自立していくという考えもあり、また大磯・国府・二宮の3町合併案も、広域行政や大磯警察署管内を同じくすることなど自然な成行きで支持が

会員85名の研究会で検討の上、町議会で3町合併方針を固め、3町合併研究会に臨んだ。しかし二宮町から改めて中井・下中・前羽を含めた6町村合併案が提出されて3町合併案は振出しに戻されることになった。この段階で大磯町は3町合併を理想としているが、最悪の場合、国府との2町合併の実現に向うべく合併交渉を進めていると、初めてまずは国府町との2町合

併案、この場合町制のまま、を表明している（旧広報第13号）。なお、同年6月の町内各層研究会は平塚市との合併案についても検討し、賛成意見として将来は平塚市に近隣町村が全部合併されるのではないかと、家庭経済が平塚に依存しているなど、反対意見に大磯の名称、特殊性を残したい、平塚の財政が自主財源5割以下で借入金や競輪・競馬の繰入金等に依存し不安定であることなどを上げていたが（同第13号）、全体に否定的で大勢は3町合併推進に集約されていた。

ところがその後合併問題は一挙に二転、三転した。同54年8月26日付『大磯町広報』号外は、「二宮町も合併に同意 順調に進めば新市実現!!」と町民に急報した。その号外によると、一時暗礁に乗り上げた3町合併案に8月20日改めて二宮町が同意し、合併手続に入る3町合併促進協議会が結成され、8月27日第1回促進協議会開催、9月にも新市認可申請を県議会に上程する予定という。

しかし事態は急展開、同年9月10日付の『大磯町広報』号外に驚く、「合併問題三転！三町合併遂に成し得ず!!」（同号外）と3町合併の挫折、3町合併促進協議会の解散が知らされたのである。9月6日二宮町より、庁舎が二宮町におかれない限り町民の意志として二宮町は単独で

行く。『大磯町国府町広報』合併特集号昭和29・10・20」という発言があり、3町合併案はその場で打ち切りになった。その結果、9月10日大磯・国府の2町合併促進協議会がただちに結成されたのである。実は二宮町との合併ばなしは、新大磯町になってからもう一度ある。4年後の1958年（昭和33）4月地方自治法の改正で同年9月までの特例市施行（人口3万以上）が認められた時である。合併市制施行を前提に両町議員懇談会が協議したが、『大磯町広報』号外、昭和33・7・24、実現はしなかった。急転直下発足した2町合併促進協議会は新町建設計画・新町名・庁舎位置などを定め、合併案は9月17日に両町議会で議決、9月30日県議会でも可決された。ここに旧大磯・国府両町の合併による新大磯町は1954年（昭和29）12月1日（水曜日）発足に決定した。新町建設の基本方針は、「その地形気候景観等の自然的条件と、歴史的な文化財に恵まれ、伝統ある町の形式、性格が自ら新しく発足する町の進み方、在り方を規定しているといえよう。即ち、理想的な住宅地を中心とし、これを囲む健全な農村地帯が相まって振興されるところに、この町の将来がある……」と謳う。50年を経て今に通じる共感を覚える。

（大磯町史総括編集委員）

「大好き！大磯」林 明子

私は出かけて大磯に帰ってくるとき、電車やバスの窓から町並みを見ると、張りつめていた心がじんわりと温かくほぐされていくように感じます。私はそんなこの町が大好きです。

この町には、たくさん動物植物が生息しています。例えば、先日まで郷土資料館で紹介されていた、高麗山。なんとこの高麗山にしか生息していない植物もありました。



昭和30年頃の高麗山

そして、海。今年の夏、アカウミガメが産卵に来て、60匹もの赤ちゃんが生まれました。大人の足よりももっと小さくて、簡単に踏みつぶされちゃいそうなのに約40mの砂浜を20分と結構速いペースで一生涯懸命、海に向かって一歩ずつ踏み出していく姿はとても感動的でした。

大磯は自然が豊かというだけでなく、行事も盛んです。毎年大勢の人でにぎわう国府祭や歴史ある高麗祭と植木市、それに宿場祭となぎさの祭典。

そして大磯の最大の特徴は、人々の情が厚いということでしょう。自然が豊かなのも、誰かが守ってくれたり、木や植物を植えてくれていたりのおかげだと思えますし、行事が盛んで素敵な施設やすばらしい場所があるのも、この町を盛り上げて活発にしようとなさっている方、そしてなによりこの大磯を住みやすい、すばらしい町にしたいと日々精進してくださっている方々のおかげだと思えます。また、いろいろなアイデアを提案している町民の思いも、この町を成り立たせている要因の一つだと思います。

こうして考えてみると、大磯って良いところがたくさんあります。しかし合併50年をむかえてもまだ、地区によって少し隔たりがあるように思います。これからももっと、行事や町の大会等を盛んにし、交流を増やしていくことによって、さらに団結した町になっていけたらなと思います。

そして、山や海の自然をしっかりりと保全し続けて、私が大人になっても、活気があってそれでいてどっしりとした趣のある、そんな町にしたいです。
(磯っ子レポート記者、国府中3年)

合併50周年記念写真展

往時の風景や50年の足跡を示す写真等を紹介します。

とき 11月14日(日)~平成17年1月16日(日)

ところ 郷土資料館企画展示室

問い合わせ 郷土資料館 ☎(61)4700



人口統計で見る

50年

合併から50年の推移を人口統計から比べてみました。

人口と世帯数

昭和30年(1955)から平成16年(2004)までの人口、世帯数、1世帯当りの人数の推移は、下表、グラフのとおりです。

年少人口と老年人口

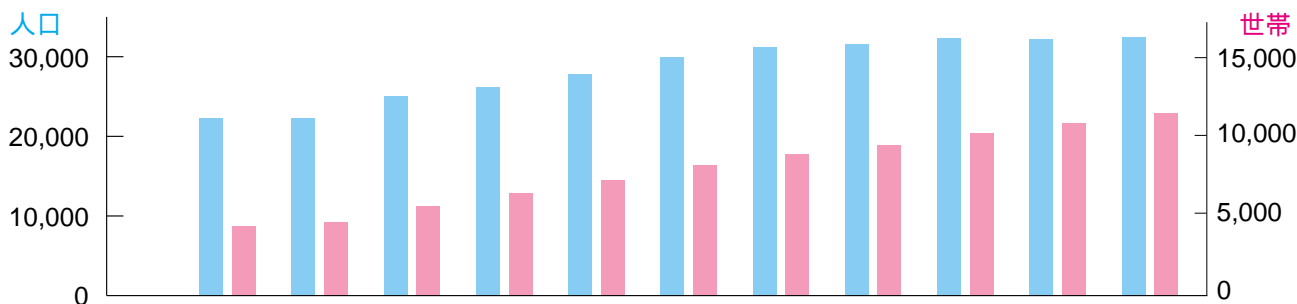
年齢が14歳以下の年少人口、15歳から64歳までの生産年齢人口と65歳以上の老年人口の推移は次表のとおりです。

また、昭和30年と平成16年の年齢5歳階級別人口ピラミッドは下図のとおりです。

区分	年	昭和30年(1955) (10/1)	平成16年(2004) (1/1)
総人口		22,231人	32,529人
老年人口		1,408人 (6.33%)	6,950人 (21.37%)
生産年齢人口		13,654人 (61.42%)	21,666人 (66.61%)
年少人口		7,169人 (32.25%)	3,882人 (11.93%)

平成16年には年齢不詳が31人含まれます

人口と世帯の推計 (各年10月1日現在) 人口 世帯



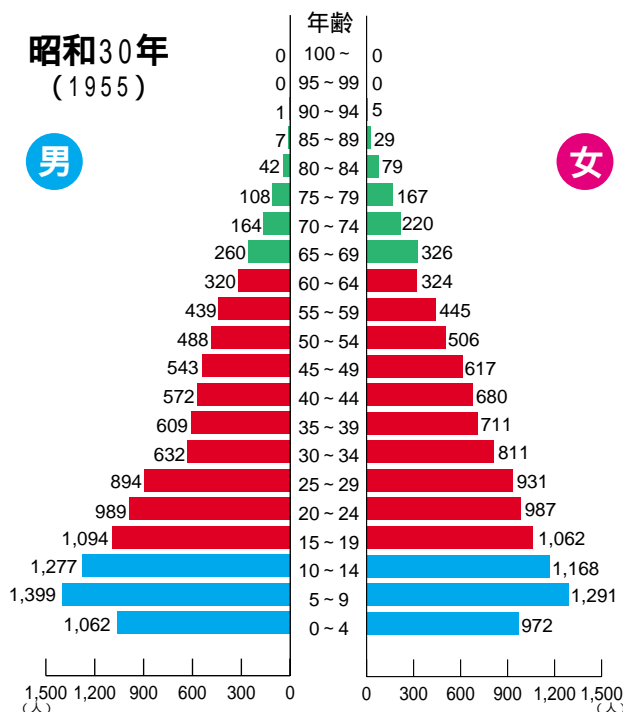
区分	年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成16年
人口(人)		22,231	22,278	25,024	26,154	27,866	29,931	31,211	31,599	32,285	32,259	32,499
世帯数		4,439	4,686	5,734	6,543	7,405	8,386	9,086	9,627	10,403	11,066	11,699
1世帯当りの人数		5.01	4.75	4.36	4.00	3.76	3.57	3.44	3.28	3.10	2.92	2.78

昭和30年から平成12年は国勢調査、平成16年は人口統計調査

年齢5歳階級別人口ピラミッド

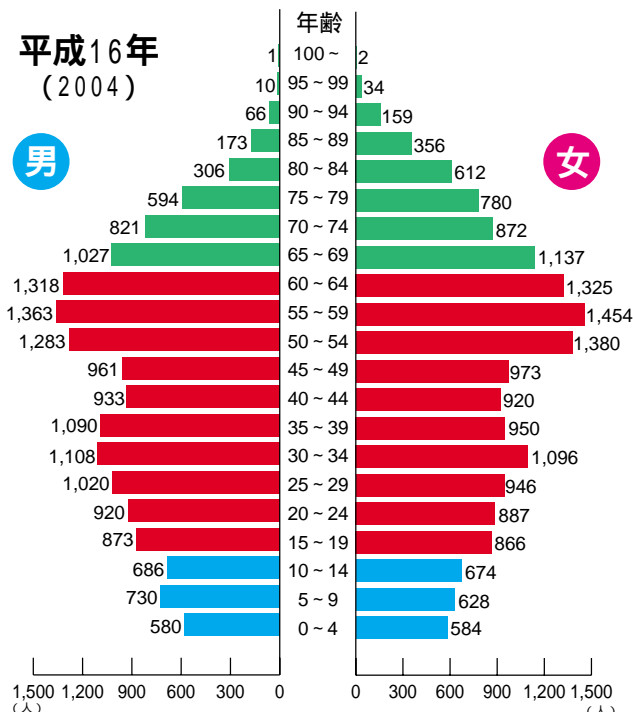
昭和30年 (1955)

男



平成16年 (2004)

男



昭和30年は国勢調査(10月1日)、平成16年は人口統計調査(1月1日)